

## 看護系大学生の職業コミットメント ～入学後2年間における経時的変化～

矢野紀子\*，羽田野花美\*\*，酒井淳子\*\*\*，澤田忠幸\*

### Occupational Commitment of Nursing Students

Noriko YANO , Hanami HADANO , Junko SAKAI , Tadayuki SAWADA

#### 序 文

医療の高度化や社会のニーズの多様化によって、看護職の役割と責任は増大してきている。看護師が質の高い看護を実践していくためには、自身の専門職者としての力を発揮していきいきと働く職場を作っていくことが重要である。いきいきと働ける職場かどうか、従来、主として、職務満足 (job satisfaction) といった観点から検討されていた。しかし、近年では、組織 (organization) や職業 (occupation) に対する専門職業人の意識を明らかにする視点として、コミットメントの概念が注目されている。これまで、個人の組織に対する帰属意識を表す概念として組織におけるコミットメントが中心に検討され、Meyerら<sup>1)</sup>によって、職業におけるコミットメントに應用されてきた。コミットメントは、組織や職業に対する心理的態度を意味しており、愛着や好意的感情のような情緒的要素、義務感や忠誠心のような規範的要素、やめると失うものが大きい存続的要素から構成していると仮定されている。組織や職業へのコミットメントは、組織への定着や職務意識・行動に関連することが明らかにされている。高木ら<sup>2)</sup>はMeyerら<sup>1)</sup>の研究をもとに、日本における帰属意識の特徴をとらえ、さらに組織コミットメントには「愛着要素」「内在化要素」「規範的要素」「存続的要素」の因子を抽出していた。

また、職業コミットメントに関して、専門性の高い職業においては、組織よりも自らの職業にコミットすることが多い<sup>3)</sup>といわれており、酒井ら<sup>4)</sup>や矢野ら<sup>5)</sup>の行った公立総合病院で働く女性看護師を対象とした一連の研究でも、看護師として働くことや現在勤務している病院 (組織) に対する義務感は低く、病院 (組織) に対するよりも看護職 (職業) に対する愛着や自己投資感が高かったことから、女性看護師は専門職者として組織との関係よりも職業との関係を重視していることが示唆された。

看護学生は、入学前からすでに看護を職業として意識し、結果、入学時にはすでに高い職業コミットメントを

持っていると考えられる。さらに、職業コミットメントは、学校教育や職業・職場等を通して形成され、職業や職場への適応に密接に関係すると言われている<sup>6)</sup>。したがって、卒業直後より専門的知識や技術を求められる看護職にとって、学生時の職業コミットメントは、就職後のリアリテショクやスムーズな職場への適応、早期離職等に関係すると考えられる。また、看護学生の職業コミットメントは、学習態度やストレス対処行動にも影響をおよぼすと言われ、入学後の早い時期から職業に直結した専門科目を学習する学生にとって、その内容や方法はそれまでの高校時代の学習とは異なり、常に看護という職業を意識しながら進めていくことになる。すなわち、「看護師 (保健師・助産師) の国家資格を取得する」「看護という仕事に就く」という目標を持って入学したものの、入学後、「向いていないのではないか」「やる気が起きない」「何か違う」等々、看護職を選択したことに悩み、結果、学習や学生生活に不適應を起こす学生が最近増えているように感じる。特に臨地実習での体験が職業志向性や不適應感に影響することや、入学動機や志望動機・看護職への志向が、入学後の学習態度や学習意欲等に影響する<sup>7)</sup>とも言われている。羽田野ら<sup>8)</sup>は、看護学生の職業コミットメントに関して、課程や学年および志望動機によるちがいの有無とその関連要因について検討した。その結果、職業的コミットメントの3側面のうち、情緒的要素のみ、課程や志望動機によるちがいが認められたが、実習による影響については確認できなかったこと、また、情緒的要素は、特性的自己効力感および教員との関係と比較的強い関連性が認められたことを報告した。さらに、矢野ら<sup>9)</sup>は3年課程および2年課程の最終学年の学生を対象に、職業コミットメントと特性的自己効力感が実習前後でどのように変化するのかについて検討を行い、3年課程および2年課程ともに、職業に対する愛着や好意的感情を表す情緒的要素のみ実習後に上昇していたと報告した。

以上に紹介したように、石田ら<sup>6,10)</sup>や寺島ら<sup>11)</sup>は、キャ

\*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

\*\*静岡県立大学看護学部

\*\*\*愛媛県立中央病院

リアコミットメントや学習態度等の変化を学年進行により明らかにしていた。また、波多野ら<sup>7)</sup>は看護職アイデンティティ発達の段階を、羽田野ら<sup>8)</sup>や矢野ら<sup>9)</sup>は職業コミットメントを、課程別に比較していた。このようにこれまでの研究では、看護学生の職業コミットメントや学習態度に関して、いずれも看護系短期大学や専門学校等の3年課程ならびに2年課程での研究が行われてきた。しかし、看護系大学が増加している現状で、看護系大学生を対象に職業コミットメントの変化に関する研究はみられない。2002年には看護系大学が100を越え、社会のニーズも高まり2006年6月現在では142校に増加している<sup>12)</sup>。医療の高度化に伴って、質の高い看護学生を養成するために、大学に求められる役割は大きいと言えよう。看護系大学では看護師資格取得に関わる教育の上に保健師さらには助産師等の受験資格につながる教育を行っている。そこで、大学生活の中で職業コミットメントはどのように変化するのだろうか。

また、Bandura<sup>13)</sup>の行動変容理論に個人の主観的確信を示す自己効力感において、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信を示す自己効力感には2つの水準がある。ひとつはある種の人格特性的な認知傾向とみなすことができる、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感<sup>14)</sup>は、自己効力感が看護師の自律性や看護師としての自己実現に関わっていることを明らかにしている。さらに、羽田野ら<sup>8)</sup>は職業コミットメントの情緒的要素は特性的自己効力感および教員との関係と相関が認められたことより、情緒的要素は個人特性が影響することを示唆していた。

以上のことから、職業コミットメント・特性的自己効力感・学生生活に対する意識の変化や関連について検討することは、学生の学習や職業・職場への適応を促進するための教育的支援のあり方の示唆を得ることになると考える。そこで本研究では、看護系大学生の職業コミットメントと特性的自己効力感が学生生活の中でどのように変化するのかについて検討を行った。そして、学習の動機づけや支援方法等教育のあり方への示唆を得ることを目的とした。

## 方 法

### 1. 調査対象

医療系大学看護学科の学生60名。

### 2. 調査期間

- 1) 入学時：2004年4月
- 2) 半年後：2004年10月
- 3) 1年後：2005年4月
- 4) 1年半後：2005年10月
- 5) 2年後：2006年4月

### 3. 調査方法

無記名自己記入式質問紙法。講義終了直後の昼休みや放課後の15分間を用いて集合方式で行い、その場で回収した。なお、無記名ではあるが、個人の追跡が可能になるよう、以下の手続きをとった。まず、今後追跡調査を行う予定であることを説明し、各自にランダムな番号を記入したカードを配布し、質問紙にその番号を記入した後、カードとともに配布した封筒にカードを入れて密封し、封筒の表には氏名を記入してもらい、質問紙とは別に回収した。2回目以降の調査では、学生の氏名が記入されたその封筒を学生に返却し、学生自身が開封してカードに記載されている番号を質問紙に記入した後、1回目と同様の手続きを行った。

### 4. 倫理的配慮

調査目的や自由参加であること、得られたデータはすべて統計的に処理し、個人が特定されることはないこと、また、研究目的以外には使用しないことや追跡調査を行う予定であること等を文書および口頭で説明した。

### 5. 調査内容

- 1) 職業コミットメント：Meyerら<sup>1)</sup>の「職業コミットメント」尺度と石田ら<sup>6)</sup>の「看護学生用キャリアコミットメント」尺度を参考に、情緒的要素（職業に対する愛着、好意的感情）6項目、および計算的要素（やめると失うものが大きいといったことを表す）6項目、ならびに規範的要素（義務感）3項目、世間体要素3項目の4因子18項目からなる尺度を作成し、「自分自身にどの程度あてはまるか」について「あてはまる」～「あてはまらない」の5段階で評定を求めた。
- 2) 特性的自己効力感：Shererら<sup>15)</sup>が尺度開発し、成田ら<sup>16)</sup>によって翻訳された日本語版23項目を用い、「自分自身にどの程度あてはまるか」について「あてはまる」～「あてはまらない」の5段階で評定を求めた。
- 3) 学習やクラスメイトおよび教員との関係についての意識：学習（困難さ・複雑さ等）7項目、教員との関係6項目、クラスメイトとの関係5項目、計18項目を独自に作成し、「どの程度そのように思うか」について「そう思う」～「そう思わない」の5段階で評定を求めた。

4) 看護職を志望した理由：内発的動機（「あこがれていた職業だから」「人や社会の役にたてる職業だから」）、外発的動機（「資格が取れ、一生働ける職業だから」「他の職業に比べて給料がよいから」）、他発的動機（「親や教師などにすすめられたから」「他にやりたいことがなかったから」）に「その他」を加えた7つの選択肢からの択一とした。

## 6. 分析方法

尺度項目ごとに「あてはまる（そう思う）」5点～「あてはまらない（そう思わない）」1点を与え得点化し、平均値と標準偏差を算出した。職業コミットメントの4要素（情緒的、計算的、規範的、世間体）および特性的自己効力感それぞれについて、時期によるちがいの有無を検討するために一元配置分散分析を行った。多重比較には5%を基準としてTukeyによるHSD検定を用いた。統計的検定にはSPSS 11.0 J for Windowsを使用した。

## 結 果

5回とも協力が得られた学生は53名（回収率88.3%）で、そのうちすべての項目に回答がされている41名を分析対象とした（有効回答率68.3%）。2006年4月入学時の平均年齢は20.4±2.8歳であった。入学時、看護職を志望した理由は、内発的動機18名（43.9%）、外発的動機17名（41.5%）、他発的動機6名（14.6%）であった。

### (1) 職業コミットメントの変化

情緒的要素の変化を図1に示す。職業コミットメント4要素（情緒的・計算的・規範的・世間体）とも時期による主効果が有意であった（情緒的： $F(4, 160) = 13.60$ ,

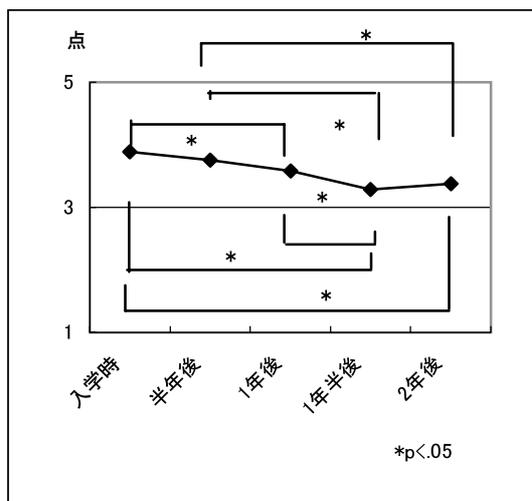


図1 情緒的要素

$p < .001$ , 計算的： $F(4, 160) = 2.65$ ,  $p < .05$ , 規範的： $F(4, 160) = 3.21$ ,  $p < .05$ , 世間体： $f(4, 160) = 3.58$ ,  $p < .01$ 。

多重比較を行ったところ、入学後と1年後、1年半後、2年後の間に有意差が見られ、いずれの時期も入学時に比べ得点が低かった。また、半年後と1年半後、2年後の間に有意差が見られ、両時期とも半年後に比べ得点が低かった。さらに、1年後と1年半後との間にも有意差が見られ、1年後に比べて得点が低かった。

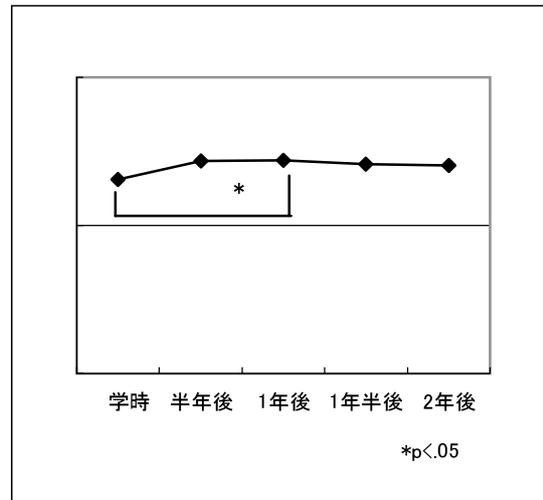


図2 計算的要素

計算的要素の変化を図2に示す。入学時と1年後の間に有意差が見られ、1年後に比べて得点が低かった。

規範的要素の変化を図3に示す。入学後と半年後、半年後と1年半後との間に有意差が見られ、いずれの時期

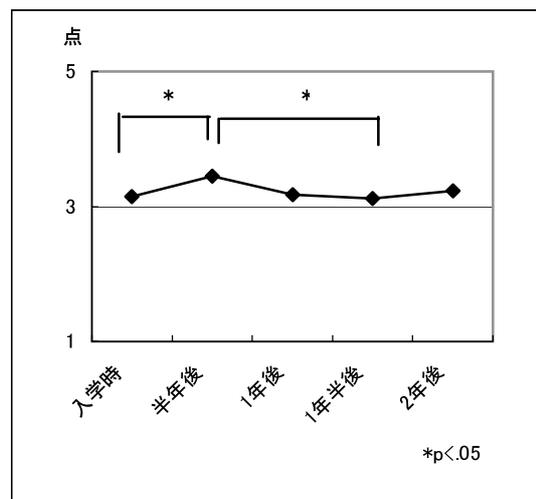


図3 規範的要素

も半年後に比べて得点が低かった。

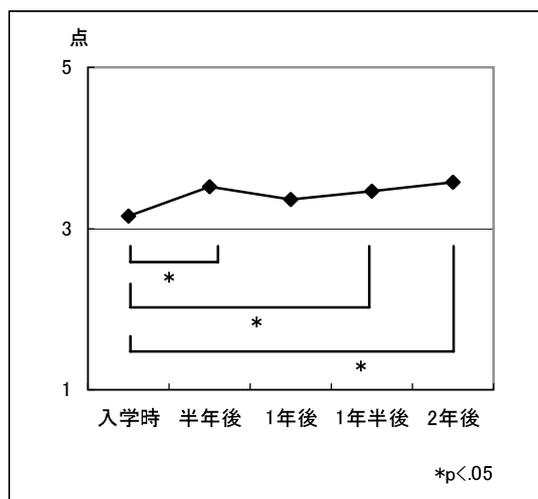


図4 世間体要素

世間体要素の変化を図4に示す。入学後と半年後、1年半後、2年後との間に有意差が見られ、いずれの時期も入学時が得点が低かった。

### (2) 特性的自己効力感および学習や教員・クラスメイトに対する意識の変化(表1)

特性的自己効力感は半年後に上昇しているものの有意な変化は認められなかった。また、学習やクラスメイトとの関係は平均より高値を示しているものの有意な変化は認められなかった。教員との関係は、時期による主効果が有意であったが ( $F(3,120) = 2.83, p < .05$ )、多重比較では明確な差が見いだせなかった。

### (3) 志望動機による変化

看護職を志望した理由の内発的動機・外発的動機・他発的動機によるコミットメントの変化をみたが動機別の変化は認められなかった。

## 考 察

職業コミットメントでは、職業への愛着や同一化を示す情緒的コミットメントが入学時から経過するにつれ有意に低下していた。石田ら<sup>6)</sup>の研究では高学年になるにつ

れ、愛着(情緒的要素)・内在化(規範的要素)は低下し、計算的・世間体要素は上昇していた。学生生活が進むにつれ、看護職への憧れが、厳しい現実が変わっていく過程で情緒的要素が低下していると考えられている。今回の結果は入学後2年の経過ではあるが専門科目の学習や筆記試験・実技試験・演習・実習等を通して、学習の困難さは感じながらも、看護の楽しさややりがいはまだ感じていないことから、同様に低下していったと考えられる。石田ら<sup>17)</sup>の研究では、情緒的要素は入学時に最も高く、2年で一旦低下し、3年次(実習終了後)には再上昇しており、臨地実習がキャリアコミットメントに影響を与えていた。今回の看護系大学生は、これから本格的な臨地実習を3年次に控えている。臨地実習が職業コミットメントにどう影響していくのか追跡が必要であると考えられる。また、教員との関係は有意差があった。実習となると教員と密接に関わる時期でもある。菊池<sup>18)</sup>の基礎・成人看護学実習を終えた3年生を対象にした研究では、教師の情緒的サポートは看護への興味・関心と関連していた。さらに、菊池<sup>18)</sup>は「教師が悩みを聞いたり、心配してくれると感じられることは、学生の看護に対する興味・関心を高める要因である」と述べている。教員と学生との関わりが、学生の職業コミットメントにどのように関連があるか今後検討していく必要がある。

やめると失うものが大きいといった計算的要素は入学時から1年後に有意に上昇し、その後は高値を示したままである。大学生にとって、入学後、学生生活を送っていくなかで、進路変更を考えることは時間が経過するにつれ、低下してくることは一般的なことだと考えられる。まして看護系大学生にとっても資格取得に向け、今さらやめるのはもったいないと考えているのではないだろうか。

規範的要素は半年後に有意に上昇するが、半年後から1年半後に有意に低下していた。看護系大学生のカリキュラムでは1年次教養科目が主であるが、看護の基礎も同時に学んでいる。初めて看護学という科目にふれ学習したことで、義務感といった規範的要素は、半年後に高まったと考えられる。その後、看護の実践といった専門科目は3年次に主に学んでいく。義務感といった規範的要素は3年次以降に再度上昇するのだろうか、今後の変化を確認する必要がある。

表1 特性的自己効力感と学習環境の平均値と分散分析結果

	入学時	半年後	1年後	1年半後	2年後	F値
特性的自己効力感	3.13±0.38	3.16±0.46	3.06±0.49	3.07±0.40	3.04±0.42	1.04
学習		3.82±0.30	3.86±0.34	3.80±0.41	3.82±0.35	0.35
教員との関係		3.01±0.63	3.29±0.62	3.07±0.63	3.25±0.77	2.83*
クラスメイトとの関係		3.63±0.71	3.75±0.62	3.70±0.80	3.73±0.74	0.37

\* p < .05

世間体要素は、入学時に比べ、半年後、1年半後、2年後の3つの時期で高かった。石田ら<sup>6)</sup>は「親から経済的に自立していないことが原因のひとつ」と考えていた。今回の研究でも「ここで看護の勉強をやめたら、家族や親戚にあわせる顔がない」と言うように、経済的援助や家族の期待を背負っていたり、まだまだ他者の目や評価が気になったりする看護系大学生にとっても同様のことが言えるだろう。

また、学習やクラスメイトとの関係、さらに特性的自己効力感に変化がなかった。このことは、職業コミットメントは、時期により変化していたことを考えると、個人における特性的自己効力感に変化しなくても、学生生活のなかで、看護に対する思いは変化する<sup>脚1)</sup>と言える。さらに、看護職を志望した理由による職業コミットメントの変化をみたが、変化に違いはなかった。このことから学習の動機づけや学習支援方法を入学動機によって変更する必要はないと考える。しかし、羽田野ら<sup>8)</sup>の研究では内発的動機をもつ者で情緒的要素が高かった。羽田野ら<sup>8)</sup>の研究対象は看護系短期大学生であり、今回の対象は看護系大学生であるため、結果が異なると考えられる。また、2年間のみ結果であるため今後も追跡調査が必要であると考えられる。

今回、変化の要因を明確にするまでにはいたらなかったものの、実習等が影響していることが推察され、本格的な臨地実習が始まる3年次から4年次へと、今後どのように変化するのか、その影響要因も含めてさらに追跡するとともに、それらの変化を踏まえた教育的支援方法を検討していく必要性が示唆された。

今後は、さらなる縦断的追跡調査を行うことによって、看護系大学生の職業コミットメントに関連する要因を明らかにするとともに、学習の動機づけや支援方法等教育のあり方を検討する必要があると考える。

## 引用文献

- 1) Meyer, J. P., Allen, N. J., & Smith, C. A.: Commitment to organizations and occupations: Extension and test of a three-component conceptualization, *Journal of Applied Psychology*, 78 (4), 538-551, 1993.
- 2) 高木浩人, 石田正弘, 益田圭: 実証的研究—会社人間をめぐる要因構造, 「会社人間」の研究—組織コミットメントの理論と実際, 田尾雅夫編著, 京都大学学術出版会, 265-296, 1997.
- 3) 高木浩人: 多次元概念としての組織コミットメント—先行要因, 結果の検討—, *社会心理学研究*, 18 (3), 156-171, 2003
- 4) 酒井淳子, 矢野紀子, 羽田野花美他: 30歳代女性看護師専門職性と心理的 well-being—組織コミットメントおよび職業コミットメントのタイプによる検討—, *愛媛県立医療技術大学紀要*, 1 (1), 9-15, 2004.
- 5) 矢野紀子, 羽田野花美, 酒井淳子他: 女性看護師の組織コミットメントと職業コミットメント—既婚・未婚による違い—, 第35回日本看護学会論文集—看護管理—, 173-175, 2004.
- 6) 石田真知子, 柏倉栄子, 杉山敏子: 看護学生のキャリアコミットメント尺度の検討, *東北大学医療技術短期大学紀要*, 8 (1), 87-93, 1999.
- 7) 波多野梗子, 小野寺杜紀: 看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化, *日本看護研究学会誌*, 16 (4), 21-28, 1993.
- 8) 羽田野花美, 矢野紀子, 酒井淳子他: 看護学生の職業コミットメントに関する検討—課程および学年ならびに志望動機による比較と関連要因の検討—, 第35回日本看護学会論文集—看護教育—, 163-165, 2004.
- 9) 矢野紀子, 羽田野花美, 酒井淳子他: 看護学生の職業コミットメントと特性的自己効力感—最終学年の一年間の経時変化に注目して—, 第36回日本看護学会論文集—看護教育—, 260-261, 2005.
- 10) 石田真知子, 山崎登志子, 柏倉栄子他: 看護学生のキャリアコミットメント, *東北大学医療技術短期大学部紀要*, 7 (1), 45-52, 1998.
- 11) 寺島喜代子: 看護学生の学習態度と自尊感情の縦断的研究—ある公立看護短期大学の場合—, *日本看護研究学会雑誌*, 21 (4), 1998.
- 12) 日本看護系大学協議会事務局: 平成18年度日本看護系大学協議会名簿, 日本看護系大学協議会編集, 千葉, 2006.
- 13) Bandura, A.: Self-efficacy; Toward a Unifying Theory of Behavioral Change, *Psychological Review*, 84, 191-215, 1977
- 14) 古谷野康子: 看護専門職の自律性に影響を及ぼす要因の分析—急性期病院の看護婦を対象として—, *聖路加看護大学紀要*, 27, 1-9, 2001.
- 15) Sherer, M., Maddux, J.E., Mercandante, B., et al: The self-efficacy Scale: Construction and Validation, *Psychological Report*, 51, 663-671, 1982.
- 16) 成田健一, 下仲順子, 中里克治他: 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—, *教育心理学研究*, 43 (3), 306-314, 1995.
- 17) 石田真知子, 柏倉栄子, 杉山敏子: 学年進行に伴う看護学生のキャリアコミットメントの変化, *東北大学医療技術短期大学紀要*, 10 (2), 83-89, 2001.
- 18) 菊池昭江: 看護学部3年生の学習意欲とソーシャルサポートの特徴—1年次と3年次の縦断的調査より—, *日本看護学教育学会誌*, 13 (3), 29-37, 2004.

## 謝 辞

調査にご協力いただいた看護系大学生の皆様へ感謝いたします。

### 脚注 1

学年の特性による影響を検討するために平成16年度入学生と平成17年の入学生のそれぞれのコミットメントの変化をみたが差は認められなかった。

### 附表 1 本研究で用いた職業コミットメント

#### 情緒的要素

- ・看護職への道に進もうとしていることを誇りに思っている。
- ・看護職をめぐしたことを後悔している。(逆転項目)
- ・本当は看護職にはなりたくない。(逆転項目)
- ・看護の勉強に熱中している。
- ・看護職にむいていないように感じる。(逆転項目)
- ・看護職になることは、私にとって重要な意味をもつ。

#### 計算的要素

- ・もし看護職をめぐすことをやめてしまったら、生活のあまりにも多くの部分が崩れてしまう。
- ・今進路を変更することは、かなりの個人的犠牲を強いることになる。
- ・私にとって、今看護職になることをやめることは損失が大きい。
- ・今、看護職になることをやめることは、私にとって難しい。
- ・これまで看護職になる勉強を続けてきたのだから、今進路をかえることは考えられない。
- ・看護職になることをやめることを躊躇させる要因は、私にはない。(逆転項目)

#### 規範的要素

- ・別の職業で将来よい仕事ができるとしても、今、看護職をめぐすことをあきらめることは正しいとは思わない。
- ・看護職になることをやめたら、私は罪悪感を感じるだろう。
- ・看護職になる義務はないと思う。(逆転項目)

#### 世間体要素

- ・看護の勉強をやめると、人になんと言われるかわからない。
- ・ここで看護の勉強をやめることは、世間体が悪いと思う。
- ・ここで看護の勉強をやめたら、家族や親戚にあわせる顔がない。

### 附表 2 本研究で用いた学習や教員・クラスメイトに対する意識

#### 看護の学習

- ・看護の勉強では相手の気持ちを深く考えなければならぬことが多い。
- ・実習や演習など看護の勉強では、こまごまと神経をつかわなければできないことが多くある。
- ・たいていの学習は、特に考えたりしなくても、機械的に進められる。(逆転項目)
- ・同じようなことを繰り返す学習内容が多い。(逆転項目)
- ・看護は、特別の教育や訓練を受けた者だけにできる仕事である。
- ・看護はたえず新しい知識や技術の習得を必要とする仕事である。
- ・教員の指示や指導にしたがってさえいけば、まちがいない。(逆転項目)

#### 教員との関係

- ・教員が、自分の気持ちを理解してくれないことがある。(逆転項目)
- ・教員は、学習などのことについて聞くと、適切な助言をしてくれる。
- ・教員の態度にかなり気をつかう。(逆転項目)
- ・演習や実習などでよい結果を出したときは、いつもそれなりの評価が教員からかえてくる。
- ・教員は、私のことを肯定的に評価してくれていると思う。
- ・教員に対して、素直に自分の気持ちや考えが言えない。(逆転項目)

#### クラスメイトとの関係

- ・クラスメイトは、私のことを肯定的に評価してくれていると思う。
- ・実習や学習などで困ったことがあっても、クラスメイト同士では気楽に話し合いができない。(逆転項目)
- ・クラスメイトは、実習や演習などで大変なときは、お互いに助け合い協力し合っている。
- ・私のクラスメイトは、お互い信頼し合っていると思う。
- ・私のクラスメイトは、お互いに気づいたことを率直に話すようにしている。

## 要 旨

本研究では、看護学生の職業コミットメントおよび特性的自己効力感ならびに学習や教員・クラスメイトに対する意識が学生生活の中でどのように変化するのかについて検討し、学習の動機づけや支援方法等教育のあり方への示唆を得ることを目的とした。医療系大学看護学部の学生41名を対象に、入学時から2年間6ヶ月ごとに計5回無記名自記式質問紙調査を行った。その結果、職業

コミットメントは4要素（情緒的・計量的・規範的・世間体）とも変化が認められ、なかでも職業への愛着や志向性を示す情緒的要素は1年後・1年半後・2年後と明らかに低下していた。一方、特性的自己効力感および学習や教員・クラスメイトに対する意識には変化は認められなかった。変化の要因を明確にするまでにはいたらなかったものの、実習等が影響していることが推察された。本格的な看護学実習が始まる3年次から4年次へと、今後どのように変化するのか、その影響要因も含めてさらに追跡するとともに、それらの変化を踏まえた教育的支援方法を検討していく必要性が示唆された。

